

---

# 探し求めるモノ

水森都月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

探し求めるモノ

### 【Nコード】

N4192K

### 【作者名】

水森都月

### 【あらすじ】

シナは依頼の元、様々な依頼品を探し求めている。人々は神々の、また、それに準ずる存在の力が宿る道具を求めて止まなかった。己のために、他者のために、国のために。だからシナは探し求める。己の願いと約束を胸に秘め、その結末を知るために……。

## 世界は昔

昔、遠い遠い昔。

人を支配していたのが人ではなかった頃。

ここにいたのは神と呼ばれる存在ではなかった。ここにいたのは特別な力を持ち、人と共に生き抜く存在たちだけだった。

彼らは手を取り合い、様々なものを築いていった。

富を、栄華を、幸福を。

彼らはそれだけで満足だった。

けれどあの日、世界が揺らいだ日からちょうど百の季節が巡ったあの日。

神々と呼ばれる存在がやってきた。

その力を携え、その存在を明らかにして。

そして聖なる森に住み始めた。聖なる森の奥に存在す、聖なる山には聖なる結界が張られ、皆無だったあちらとの行き来は絶望的になった。

その森を守るようにして、神に仕える者たちが、森の周囲を囲むように住み始める。神に仕える一族以外の森への侵入を遮断し、神々の存在を守るために。

神々はやってきた。

彼らの世界を連れて。



## 青年と女性

「へえ、じゃあ王都からわざわざ！」

そう言っ て目を見開いて驚いた中年の女性に、こくりと青年はうなずいた。ほんの少し幼さの残る精悍な顔立ちの青年は、くたくたの服と薄汚れたマントを羽織り、使い古した背囊はいのうを彼が座る椅子の脇に置いていた。無表情に近い顔の表情にもよく見れば疲労が見え、無造作に伸ばされた黒灰色の髪は埃っぽい。見るからに旅人といった青年は、漁師や商人ばかりの赤レンガ造りの港町には不似合いに見えた。

一方女性は少々ふつくらとした体系で、長い黒髪を頭の高い位置で一つにまとめ、色あせた薄緑の胴長の上衣を着ている。下衣は茶色の長めのスカートで、程よく日に焼けたくるぶしが使い込んだ靴との間に見え、いかにも町女といった具合だ。

「でもあんた物好きだね。ほとんど国の反対側じゃないか」

女性は呆れたように青年に言っ たが、彼はただ「まあな」としか答えなかつ た。

女性の言っ とおり、王都は海の傍にあるこの町とは正反対の内陸部にある。馬で飛ばしても早くて十日、徒歩ではその五倍以上は確実にかかる。それなのにわざわざ青年はこの町までやって来たのだ。「小耳に挟んで……どんな祭りが興味があつ た」

青年は手に取つ たカップを傾けた。うなりながら女性は怪訝そうな顔をした。

「そんなに有名になつ たんかい、ここの祭りは」

「噂程度だつ たが。まあ、直に？ 会える？ のは珍しいからな」

こくりと飲んだ茶の渋みの中にほのかな甘みがある味が舌に残り、青年はどこかほつ としながらカップを置いた。皿に乗つ た丸く平べつたい焼き菓子に手を伸ばし、一口二口と咀嚼そしゃくしていく。

こんがりと焼けた菓子は甘そうな見た目に反してぴりりと辛い。  
この地方特有の木の实を砕いて混ぜているらしく、独特の風味も加わり好みが分かれる味だ。けれどそれが癖になり、彼はもう二回ほどおかわりを頼んでいた。

「本当に珍しいんだろうけど……」

青年の言葉に苦笑しながら女性は答えた。

「にしても、王都からねえ」

どこか納得言っていないような顔で女性は深く椅子に座り直した。そしてそのままコップに入った果実酒を仰ぐ。誘われて入った食堂で昼間から堂々と酒を仰ぐのは正直どうかと彼は思うのだが、祭りの最中であるからか回りは皆同じような状態だった。酒を飲み、うまいものを食べ、騒ぐ。祝う時期や対象、場所は違っても、この祭りの内容も同じ。

女性もそう思ったのだろう。不思議そうに彼に訊いてきた。

「王都のほうで珍しいものがたくさんあるんじゃないか、え？」

そうして焼き菓子を豪快にはおぼる。青年も最後の一枚を皿から取り出し食べた。大きく喉仏を上下に揺らして飲み込む。

「王都に珍しいものがあるのは当然だ。それが王の御座す都だからな」

こともなげにそう言い放ち、平然と茶を飲んだ。格好に似合わぬ優雅な雰囲気と行為で、女性は戸惑いがちにじっと青年を見ていた。彼は無遠慮な視線に気分を害すでもなく、ただほのかに口角を上げる。

「俺は興味を持ったからここに来た。ここの神　人魚様に」

青年の纏う空気ががらりと変わる。惹きつけられるような、それでいて関わりたくない危険なものに。

女性が息を吞んで注目する中、青年はふっと息を吐き無表情に戻るとカップを置き背嚢を手にとって立ち上がる。テーブルの上に代金を置くと、女性に一礼した。

「本当にありがと、町に着たばかりで道がわからなかったから案

内してもらえたのは助かった」

女性は啞然とした様子でしばし青年を見つめていたが、首を振って満面の笑みで笑った。

「いいっていいって。あたしにできるのはそんなくらいさ」

女性の朗らかな様子に青年はどこかほっとした。あんな態度をとった後では何だか普通に接しづらいというものだが、この相手はまったく変わらなかったからだ。

「そういえば、宿はまだ決まってるだろうか？」

女性も立ちあがると、二人は入り口を目指した。

「ああ、まだだ」

扉を明けながら言ったその答えに、女性は愉しそうに持ちかける。

「じゃ、あたしとこの宿に来ないかい？ どうせ祭りの今じゃどこも埋まって泊まれないだろうし」

青年は目を丸くしてから、「いいのか？」と問いかけた。

「相部屋だから、相手の了承を得ないといけないけど」

「泊まれるだけでありがたい」

「じゃ、決まりだ」

女性は満足そうに目を細めた。

「ここでできた縁を大切にしたいし……あんた、普通と違って面白そうだからねえ」

「……否定はしない」

少し不服そうに青年は肯定した。そんな青年に女性は笑う。

「よろしくねお客さん。あたしはリンダだよ」

「シナだ、よろしく」

綺麗な青だった空は、いつの間にか紫に変わっていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4192k/>

---

探し求めるモノ

2011年10月6日23時06分発行